法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-02-06

トランスナショナルな日本研究に向けて

TAKATA, Kei / 髙田, 圭

(出版者 / Publisher)
法政大学国際日本学研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学
(巻 / Volume)
20
(開始ページ / Start Page)
21
(終了ページ / End Page)
45
(発行年 / Year)
2023-02-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00026761

トランスナショナルな日本研究に向けて

髙　田　　圭

1. はじめに

20 世紀末からの国境を越える活動の促進と拡大によって、トランスナショナルな視点から世界を捉えるアプローチは飛躍的に発展した。そうした社会学、歴史学、文化研究を中心に展開されたトランスナショナルな研究は、近年、日本研究を含めた地域研究にも応用されている。しかしながら、我々がそうした国境を越えた視点に着目する日本研究を「トランスナショナルな日本研究」と呼ぶ時、その呼称にはいささかの矛盾を感じざるを得ない。日本研究というまさにナショナルな対照をトランスナショナルに描くとはどのようなことか。またそれは日本研究・地域研究の否定となるのか、はたまた再生への糸口となるのだろうか。トランスナショナルな視点からの研究の増加に反して、こうした問いに対しては、これまで十分に答えられて来なかった。筆者は、以前『国際日本学』第 18 号の「グローバル地域研究としての国際日本学―日本を超えて，日本をとらえる，思考と手法―」においてトランスナショナルな地域研究について部分的に論じた（髙田 2021: 21-5）。しかしながら、旧稿ではトランスナショナルなアプローチが日本研究にもたらす意義については十分に展開することができなかった。そこで本稿では、これまでの議論を踏まえつつ、国境を越える現象を追うトランスナショナルな日本研究が、日本という国民国家を相対化しつつも同時に新たな日本像を提示するアプローチになり得ることを論じる。

こうした議論を展開するにあたって、まず、次節ではトランスナショナリ

ズムの概念的な説明を試みる。ここでは概念の歴史的展開を論じた後、グローバル、インターナショナル、また越境といった類似の概念との比較からトランスナショナリズムの特徴を大まかに掴み取る。1990 年代以降のトランスナショナリズム論は、近代の人文社会科学が依拠してきた国民国家の枠組み、即ち方法論的ナショナリズムを乗り超える新たな方法論として発展した側面がある。そこで、第 3 節では、社会学、歴史学、地域研究それぞれの分野でのトランスナショナルなアプローチについて、各分野の違いに着目しながら解説する。第 2 節、第 3 節の概念的整理を踏まえて第 4 節では、本稿の中心的テーマであるトランスナショナルな日本研究について議論を展開する。トランスナショナルな日本研究のあり方として国民国家を分析の対象から外すのではなく、あえてそれを国境を越える分析の中心に据えることで「日本」の特徴の再発見につながることを論じる。

2. グローバル・インターナショナル・トランスナショナル

トランスナショナル（transnational）という言葉は、現在では幅広く認知され、特に英語では新聞などの一般的なニュースメディアで使われるほど浸透している。とはいえ、その多様な使われ方故にこの言葉が意味するところ、特に関連する類似的な概念との違いに混乱が生じることも少なくない。実際にこの概念は、100 年ほどの歴史があるにも関わらずようやく 20 世紀末になってから徐々にその意味が共有されるようになった。歴史を紐解けば、そもそもトランスナショナルという言葉は、アメリカの作家ランドルフ・ボーン（Randolph Bourne）が 1916 年に差別主義者から移民を守るために使用したのがはじまりだった。その後数十年が経ち、1970 年代初頭に政治学者のロバート・コヘイン（Robert O. Keohane）とジョセフ・ナイ（Joseph Nye）が国際関係論の文脈で使用するようになった。彼らは、従来の政府間の関係あるいは国際機関のみに注目する既存の国際政治に対してトランスナショナルという言葉を使い多国籍企業、教会、財団、社会運動、労働組合などを含めた包括的な国際関係論の再構築を目指した（Keohane and Nye 1972）。しかしながら、コヘインらの「トランスナショナルな国際関係論」

はあまりにも変数が多く複雑で、また従来の国際関係論者からの反発も多く定着することはなかったという（Green 2019: 35）。その後、1990年代になるとトランスナショナルの概念は、人文社会科学において一際注目を集めるようになる。人類学者のウルフ・ハナーツ（Ulf Hannerz）が1996年の著書 *Transnational Connections: Culture, People, Places* において国境を越える文化のフローをトランスナショナルの語を用いて扱った（Hannerz 1996）[1)]。また社会学ではLinda Basch（リンダ・バーシュ）らがトランスナショナリズム概念を使った先駆的な移民論を展開し注目を集めた。バーシュらは、ホスト国での統合に注視していたそれまでの移民研究に対して、実際の移民は、トランスナショナルなネットワークを通じて母国とホスト国との間の地理的、文化的境界を乗り越えながら多元的な帰属意識を持って生活を送っていることを主張し、移民研究に新しい息吹を吹き込んだ（Basch et al. [1993] 2005）。これらの著作がきっかけとなり、その後「トランスナショナル」は様々な分野で広く使われるようになっていく。例えば、市民社会、社会運動論の分野においても1990年代後半から国境を越える社会運動ネットワークの役割に注目した研究が数多く出されるようになった（例えば、Keck and Sikkink 1998）。

こうした1990年代の半ばから普及したトランスナショナリズム概念の特徴は、どのようなものなのだろうか。この言葉が広く様々な分野で使用されたこともあり、厳密な意味での統一した理論というのは定まっていない。移民研究者のトーマス・ファイスト（Thomas Faist）もトランスナショナリズムは一貫した理論というよりも様々な国境を越える現象を捉えるための視座として考えるべきだと述べている（Faist 2013: 450）。とはいえ最低限の定義としては「人、モノ、情報、想像力の主権国家を越えた拡張と移動」と考えて良いだろう。その上で、トランスナショナリズム論においては、国境を越える現象のとりわけ以下の三つの側面に着目することが重要だと言える。まず、「下から（from below）」の国境を越えた移動への注目である。即ち、国家権力やグローバル企業などの「上から（from top）」の国境を越えた移動とは異なる下からの越境が強調される。二つ目にミクロな過程、即ち、人

などが実際に国境を越えていくその具体的なプロセスに分析の主軸を置く。そして三つ目に、国境越える実践がもたらす社会変容への着目である。それは国境を越えた移動に既存の国家や社会のあり方を突き崩す主体（agency）を見出すものである（Tedeschi et al. 2020）。

こうした特徴を踏まえてトランスナショナリズム概念のイメージをもう少し明確にするためには、類似の概念との差異から見ていくことも有益だろう。まずトランスナショナリズムと混同されがちな概念としてグローバルあるいはグローバリゼーション（globalization）が挙げられる。確かにこれら二つは関連性の高い概念であり、両者は 20 世紀後半の国境を越えた活動の飛躍的増加に伴い頻繁に使われるようになった。しかしながら、グローバリゼーションとトラナスナショナリズムでは強調する側面が幾分か異なる。グローバリゼーションは、これまでのナショナルなものをベースとした社会的状況をグローバリティの一つへと変容させる過程のことである。ここで言うグローバリティとは経済、政治、文化、環境のグローバルな相互連関性が既存の国境や境界を突き崩す社会状況のことを指す（Steger 2020: 2）。トランスナショナリズム同様、グローバリゼーションも国境を越えたつながりに着目するが、ここで強調されるのはむしろ世界的な相互連間の強まりである。そのためグローバリゼーションは「鳥の目」から地球の様々な地域のつながりが強まっていくその歴史的過程に着目する。グローバリゼーションは、人類の誕生から始まっており、先史時代（紀元前 10000 年頃～紀元前 3500 年頃）、前近代（紀元前 3500 年頃～紀元後 1500 年頃）、近代初期（1500 年頃～ 1750 年頃）、近代（1750 年頃～ 1980 年代）、現代（1980 年代以降）と技術的な発展に伴い異なるフェーズを経て進んできたと見做される（Steger 2020: 18）。従って、グローバリゼーションは、人類の歴史を遠く離れて生活する人々の相互連環が徐々に強まっていく過程と捉える一つの世界観と言えよう。もちろん、その過程には様々な紆余曲折があり、またその道程も地域によって多様性があるものの、グローバリゼーションには一つの統合された世界へと向かっていくイメージがつきまとう。こうしたマクロな統合のイメージに対して、トランスナショナリズムは、よりミクロな視点から人、モノ、情報、想

像力などが国境を越えていく個別具体的な現象を追いかける。また国境を越える実践がもたらす社会変化も、グローバリゼーションが想定する同質性の高まりというよりも、個々のコミュニティの変化や人々の認識の変容などの多様で複雑な帰結に着目する。更にグローバリゼーションは、経済、政治、文化の各領域で展開される現象であったとしても「グローバル資本主義」と言われるように経済資本をその原動力としてみなすことが多い。それに対して「トランスナショナル資本主義」という言葉が一般的でないように、トランスナショナリズムは経済資本を主要な変数とはせず、人、制度、市民社会、文化、知識などの社会（学）的な領域に着目する傾向が見られる。

もう一つインターナショナルあるいはインターナショナリズムもまたトランスナショナリズムとの関連性が高い概念である。しばしば「国際」と訳されるインターナショナル（international）は、「世界（world）」と共にとりわけグローバル、トランスナショナルが使用される以前の 1980 年代まで国をまたいだ活動一般を指す言葉として多用されていた。インターナショナルとトランスナショナルには共通性もある。例えば、インターナショナルもトランスナショナル同様グローバリゼーションのような一元化の過程を意味するものではない。また、両者は共に一つの国民国家の外の関係に着目する言葉である。ただし、こうした共通性を持ちつつも、2 つの概念には、とりわけ国民国家の扱いをめぐって重要な違いがある。Inter- は「間の」という意味であるため、インターナショナルとは文字通り「国家間の」の意になる。ここでは国が単一の実体として想定されており、それぞれの独立した国との関係が国際関係（international relations）と言われる。従って、インターナショナルにおいて想定される国境をまたいだ活動も基本的に国民国家を前提としており、それは極端に言えば、国民国家の管理下のもと国を代表した他国の人々との交流を指す。外交活動はもとより、海外での企業活動も政府間の取り決めによって牽引され、またスポーツの交流も各国を代表して国際親善試合などに挑むような国をまたいだ関係が端的な例となる。そして、国際関係が想定する主体は、国家の一部あるいはそれに近い立場にある国家エリートたちである。また、国家エリートでないにしても、個々人の意識のレベルに

おいて国を背負った意識で他国の人と対峙する場合、例えば「私は日本人」として他者である「アメリカ人」と会話をしているという強い自己認識を伴う場合、それはインターナショナルな姿勢での交流と言える。こうしたインターナショナルな関係は、国民国家の枠組みを強化することはあっても、それを壊すような作用はない。それに対して、トランスナショナリズムのtrans-は「越える」または「超える」の意味（ラテン語の語源では横断の意）であることから、国民国家を越える（beyond）・超える（transcend）という意味を持つ。それ故、トランスナショナルの語には国を乗り超え、国民国家を相対化する意味が付随する。従って、理念的に言えば、トランスナショナリズムは、上からの（from the top）国家エリートによる他者との国際交流ではなく、「一般」の人々による下からの（from below）国境を越えるつながりを重視する。またトランスナショナルなコミュニケーションでは、個々人がナショナルなアイデンティティを超えて、同じ人として、自らとは異なる国、文化を出自とする人とつながり、対話する態度が肝要となる。

こうしたようにトランスナショナリズムは国民国家の境界を超えることに重点が置かれるが、もう一つ、境界を乗り超えるという意味で類似性の高い概念に「越境」がある。この言葉は、日本の人文科学でとりわけ2000年代以降、カタカナのトランスナショナルよりも馴染み易い言葉として浸透していった。それに対して、英語圏ではむしろトランスナショナルの普及に反して越境は多用されず、人文社会科学でtransboundaryという言葉が使われることはほとんどない。ただし、社会学の分析概念としてのboundary-crossingは、遅くとも1990年代中葉から導入された[2)]。例えば、境界社会学（sociology of boundary）において、ジェンダーやセクシュアリティ、また人種や国民など近代的な知によって構築されたカテゴリー（boundary-making）に対して、そうした境界を揺るがし乗り超える概念としてのboundary-crossingが唱えられた（Lamont and Molnar 2002）。それでも、boundary-crossingの概念は、トランスナショナルほど社会学あるいは教育学を超えて広く人文社会科学に普及したとは言い難い。

越境は、境界を越える現象全般を捉えるという意味でトランスナショナリズムよりも包括的な概念だ。それは逆に言えば、トランスナショナリズムがより具体的な対象の越境、即ち国民国家を越えることに焦点を当てている点に特徴があることを意味する。トランスナショナリズム概念の背後には、国民国家が近代における極めて強力で支配的な装置として生み出されてきたという認識がある。ウェストファリア条約（1648 年）から始まった近代の国境設定は、その後、言語、文化、慣習の統一を図り「国民」を誕生させた。領土的な線引きのみならず、人々の意識の上でも自国（ウチ）と他国（ソト）の間に明確な境界を設定する国民国家の制度と世界観が特に 18 世紀以降に支配的となり、それは戦争や差別など多くの負の側面も生み出してきた。トランスナショナリズムには、こうした国民国家の一側面を問題視し、それを乗り超えるという政治的課題が付随する。もちろん、次節で論じるように、分野や論者によって温度差はあるものの、国民国家批判は、他の類似概念にはないこの言葉が持つ特有の問題意識と言える。

以上の概念的な差異をまとめると、トランスナショナリズムは、グローバリゼーションのようなマクロな統合のイメージではなく、下からのミクロな国境を越える活動に着目する。またインターナショナルは、国民国家を前提とした関係であるのに対してトランスナショナルは、国民国家を超えるつながりを指す。越境は様々な境界を超えることを意味するが、トランスナショナルはその中でも国民国家が作り出す強靭な境界を乗り超えることに注視する。トランスナショナリズムの特徴は、このように類似概念との対比を通じておぼろげに浮かび上がってくるだろう。

3. 方法論的ナショナリズム批判とグローバル・ターン

しかしながらここで重要なのは、トランスナショナリズムが単に国境を越える実践を捉える一つの概念ではなく、近代的な知のあり方の転換というより大きな問題とも密接に関わっている点である。その知の転換とは、時にグローバル・ターン（あるいはトランスナショナル・ターン）と呼ばれ、これ

までの人文社会科学の問題点を顕にし、新たな視座と方法論を提供してきた。ただし、こうしたグローバル・ターンの表れ方には、分野毎に違いもある。以下では、社会学、歴史学、地域研究におけるトランスナショナルな知の転換がどのように展開されてきたのかについて分野毎の特徴を踏まえて論じていく。

トランスナショナルな視点からのパラダイムシフトは、まず社会学を中心に方法論的ナショナリズム批判という形で展開した。端緒となったのは、2000 年に刊行されたジョン・アーリ（John Urry）の著書 *Sociology Beyond Society: Mobilities for the Twenty-First Century* である。本書は、近代の社会科学における「社会」とは、社会的構成員並びに市民の権利と義務を組織する国民国家によって構成される主権的な社会的実在であるとした。そして社会学の言説が依拠してきた「社会」とは即ち国民国家を指していることを指摘し、またそれを問題視した。アーリはこうした国民国家を前提とした「社会」を乗り超えていくことを提唱し、「社会」を固定的、秩序立ったものと見るのではなく、動きや移動性、偶発性を前提に再構成していくことを主張した（Urry　2000=2015）。本書でのアーリの議論は、直接的にトランスナショナリズムを論じるものではなかったが、彼の「移動」の概念は、後にトランスナショナル・モビリティーズとして国境を越える様々な移動を捉える概念として発展していく。

その後、社会学と国民国家の結びつきの問題を深化させていったのがアンドレアス・ウィマー（Andreas Wimmer）らによる方法論的ナショナリズム批判であった[3)]。ここで言う方法論的ナショナリズムとは、社会科学者たちのナショナルな枠組みに依拠した世界観、認識のことを言う。ウィマーらはこれを「社会科学における最も重要な『集団主義的思考』」であるとし、歴史上の最も洗練された理論家たちでさえも、近代社会の分析に際しては、ナショナリスティックな包摂と排除が我々の社会を統合していると言う無意識の前提に立ってしまっていると批判した。言うならば、社会科学は、世界が国民国家によって分断された個々の社会によって構成されていると言うもっ

ともらしさと所与性に囚われてきたのである（Wimmer and Schiller 2002: 220）。それは例えばカール・マルクスにおいても国民国家間の連帯が解決策であったし、エミール・デュルケムに至っても彼が論じる友愛組合は、国民統合に組み込まれていった。また世界宗教の経済的倫理観を分析したマックス・ウェバーでさえもその政治的発想の源泉は、国家間比較の方法論などナショナルなものであった（Beck 2007: 286）。更に言えば方法論的ナショナリズムは、理論家たちのナショナルな思考枠組みに留まらない。ウィマーらは、方法論的ナショナリズムによって、人々は近代国民国家形成におけるナショナリズムが果たしてきた役割を見過ごしてきたと批判する。国民（nation）と国家（state）を分離させることで、国家を自然発生的に生じた中立的な制度として扱い、その結果、実際に近代国家はナショナリストのプロジェクトと密接に結びついているにも関わらずその点を覆い隠してしまう。そしてナショナリズムの役割は、国家形成だけでなく民主主義の発展にも大きく影響を与えてきたが、それすらも見過ごされてしまっているのである（Wimmer and Schiller 2002: 223-4）。

更に、ウィマーらが方法論的ナショナリズムの三つ目の問題として挙げるのは、社会科学的想像力が領土的に制約されており、また社会科学の分析対象が国民国家へと限定されている点である。社会科学は、国民国家内で生じる現象のみを描くことに固執し、国境によって分断された領土同士のつながりについては射程外であった。社会科学は、長らく国民国家を器（container）として捉え、その器の中の現象のみに注視してきたのである。確かにウィマーが指摘するように、20 世紀までの社会学の実証研究は、例えばアメリカの教育、日本の家族、ドイツの社会運動といったように国民国家内の現象のみを取り扱ってきた[4)]。また方法論的なナショナリズムは、より大きく国家間比較を展開する比較社会学者にも当てはまる問題である。例えば、比較歴史社会学者の Theda Skocpol（シーダ・スコッチポル）は、革命が生じた国（フランス・ロシア・中国）と革命が起きなかった国（日本、ペルシャ、イギリスとドイツ）の国家比較という画期的な仕事を成し遂げた（Skocpol 1979）。しかしながら、彼女は革命（あるいその不在）の要因を各国の政治

社会構造のみに求め、国境を越えたつながりの影響については見過ごしていた。実際の革命の背景には、例えば、1920 年代から 1949 年にかけて中国がロシアのボリシェヴィキの戦略を学んだことが中国革命に与えた影響や、1949 年以降の中国の政治・社会変革においてソヴィエト体制がモデルになったことなどトランスナショナルな影響も少なくないが、そうした側面は考察の対象外であった（Arnason 2000）。

近代の社会科学がほとんど例外に漏れず、ナショナルな思考枠組みに囚われてきたという問題提起は、移民研究に限らず広く社会科学者に衝撃をもたらした。多くの「グローバル」を掲げるジャーナルが出され、アメリカ社会学会では、2008 年に「グローバル・トランスナショナル社会学（Global and Transnational Sociology）」のセクションが設置されるなど制度化も進んだ。その結果、実証的には、移民研究に限らず、市民社会・社会運動、教育、ツーリズム、文化、メディア、都市、知識など様々な社会学内の分野でトランスナショナルな研究が進んできた。また、理論的にもトランスナショナルな現象をより的確に捉えるための概念化が発展した。そうした理論化は、方法論的ナショナリズムに囚われた既存の社会学理論をトランスナショナルな枠組みに組み替える形で進められることは少なくない。例えば、米国の社会学者のジュリアン・ゴー（Julian Go）らは、ピエール・ブルデュー（Pierre Bourdieu）の界（champ/field）概念をトランスナショナルな文脈に適応させ、国境を越えたスケールで人々が資本を巡る闘争を展開している場を概念化している（Go and Krause 2016）。

社会学同様、歴史学もグローバル・ターンに強く影響を受けた学問領域の一つである。20 世紀終わりまでの歴史学の対象はもっぱらは国民史（national history）であり、国境を越える歴史を描くことは極めて稀だった。フランス社会科学高等研究院の歴史学者ナンシー・グリーン（Nancy Green）は、著書 *The Limits of Transnationalism* の中で、歴史家たちは、国境を越えたトランスナショナルな実践は必ずしも 20 世紀後半以降の新しい現象ではなく、それは以前から長きにわたって人類の歴史に存在してきたことを認識し

ていたが、そうした国境を越える側面に注目して歴史を描くということは、グローバルまたはトランスナショナル・ヒストリー以前には存在しなかったと論じている。言うならばトランスナショナル・ヒストリーとは「古い歴史の新しい歴史学（Old History, New Historiography）」なのである（Green 2019: 33）。もちろんそれまでも世界史（world history）は存在していたが、それらは主に文明間の比較に焦点が当てられており、またその背景には西洋中心主義的な世界観がある一方で国民国家を超える視点は薄かった。そのような世界史に対して国境を越えた接続と社会のグローバルな統合に主眼を置くグローバル・ヒストリー（global history）が生まれた（Conrad 2016=2021）。またトランスナショナル・ヒストリー（transnational history）は広い意味でのグローバル・ヒストリーの一部を成すものと見做されることが多いが、グローバルな統合というマクロな視点よりも特に国境を越えるミクロなプロセスに着目していくことにその特徴がある。入江昭は、インターナショナル・ヒストリー（international history）が主権国家間の関係を歴史的に描くのに対して、トランスナショナル・ヒストリーは、個人や非国家的なアクターの国境を越えたつながりに着目すると説明している（Irie 2013: 15）[5)]。

とりわけ2000年代以降は、国境を越えた歴史現象を追う数多くの仕事が生み出されてきた。2006年にはケンブリッジ大学出版会より *Journal of Global History* が創刊され、2021年にはインパクト・ファクターは102の歴史学の国際雑誌のうち第2位につけるほど影響力の大きいジャーナルとなった（Journal of Global History 2023）。こうした トランスナショナルな方法論が多く採用されたのは、何よりもこのアプローチが歴史上のこれまで見過ごされてきた側面に光を当てることを可能にしたからである。確かに、歴史学のグローバル・ターンにも国民国家を乗り超える意志が潜んではいる。しかしながら一般的には、後述する地域研究と比べるとそれを全面に押し出す傾向は見られない。歴史学でのトランスナショナリズムは、むしろ、分析概念として歴史的現象を国境を越える視座から捉える方法論的な意味合いが強い。また、歴史学におけるグローバルやトランスナショナルの理論や方法

論は、厳密な定義づけに基づいた分析というよりも、それぞれの事例に合わせて柔軟に適用されている。トランスナショナルの概念には曖昧さがつきまとうが、逆にそうした特徴が新たな方法論として広く、早く普及した理由の一つと言えるだろう。

最後に、本稿にとって重要な地域研究におけるグローバル・ターンについて論じる。地域研究におけるトランスナショナリズム論は、社会学や歴史学のそれとはやや学問的系譜が異なる。地域研究においてトランスナショナルな視点を導入したいわゆる批判的エリア・スタディーズ（critical area studies）の潮流は、元来カルチュラル・スタディーズやポスト・コロニアルスタディーズからの影響が強かった。そのため、1990 年代に展開されたポール・ギルロイ（Gilroy 1993 [2006]）の「ブラック・アトランティック」の研究、ホミ・バーバ（Bhabha 1994 [2012]）のハイブリディティ論、スチュワート・ホール（Hall 1996）の「西洋と残余」の議論などを下地にしながら西洋中心主義、国民国家と深く結びついた従来の地域研究を乗り超える新しいトランスナショナルな地域研究が提唱されている。とりわけ日本研究において端緒となったのは、帝国主義を批判的に捉える研究であった（Ikeuchi 2022: 47）。

従来の地域研究は、国民国家の厳格な境界を前提としたインターナショナリズム、そして西洋から非西洋を調査、研究する学問領域として成立した。それは、政治的には西洋の国々、特に戦後は米国の支配と密接に結びつき、また文化的には、西洋から非西洋へのオリエンタリズム的眼差しを内包していた。いずれにしても背景にあるのは、国民国家を前提とした「我々」と「他者」、「ウチ」と「ソト」とを明確に区分するインターナショナリズムの発想である。とりわけ米国の地域研究は、第二次大戦中の敵国支配と結びつき、戦後は冷戦構造の中で確固たる基盤を築いた。しかしながら、1990 年代の冷戦崩壊とグローバル化は、それまでの地域研究の問い直しを迫った。その結果、この時期から地域研究の姿は、徐々にそれまでの一地域を対象とするものから政治的、経済的な地域を越えた結びつきを加味した「インターナショ

ナル・スタディーズ」へと変貌していった（Cumings 1997: 8-9）[6]。

その後、21 世紀に入ってから、より強く西洋中心主義批判と国民国家批判を内包した地域研究のトランスナショナル・ターンが進んだが、そこには社会学、歴史学などのディシプリンとはやや異なる地域研究独自の問題が内包していた。国民国家の成立とともに発展した近代の人文社会科学は、総じて方法論的ナショナリズムの問題を孕んでいた。しかしながら、たとえ国民国家を器として扱ってきたとしても基本的にディシプリンは、人類一般の様々な営みの一側面に光を当てる（例えば、文化的営み、政治的営みなど）学問領域である。そのためその主な対象は、例えば社会学で言うと家族、組織、環境、社会運動などの制度や社会現象であり、国そのものではない。それに対して地域研究は、国民国家を前提とした「地域」とそこに住む人々を直接的に扱う領域である。従って、この学問領域は、政治学、社会学、歴史学、文学などのディシプリン以上に国民国家との結びつきが強い。『武士道』（新渡戸稲造）、『菊と刀』（Ruth Benedict）、『タテ社会の人間関係』（中根千枝）など日本研究の古典を見ても、そこには必ず「日本人とは何か」や「日本文化の固有性」といった問題がつきまとう。そして、それは時に他者による支配の知として機能する。また「日本人」自身が他者の眼差しに呼応し、民族としての特殊性を本質主義的に語ればいわゆる「日本人論」へと向かっていく。

こうしたように地域研究にとって方法論的ナショナリズムは盲点であったというよりも、アイデンティティそのものであったとも言える。それ故、地域研究における方法論的ナショナリズムの乗り超えは、特段困難が伴う。そして、乗り超えを試みた場合、両者の関係が密接であるからこそ、国民国家への批判がよりラディカルになる傾向も見られる。日本研究の領域では、2019 年にガビン・ウォーカー（Gavin Walker）と酒井直樹が “The End of Area（地域の終わり）” という挑発的なタイトルの論考において「地域（Area）」概念の転換を訴えた（Walker and Sakai 2019）。ただし、酒井らの議論は、地域研究自体の「終わり」を主張しているのではなく、従来の意味での「地

域」が「終わった」と論じるものだ。これまでの地域研究は「西洋と残余（the West and the rest）」といった図式や国民国家を基礎とした地政学的な権力関係を基に構築されてきた。しかし、21 世紀の段階においてそうした枠組みはこれまでと同じようには機能しなくなっており、必然的に地域研究のあり方自体も変容せざるを得ないと訴える。確かに西洋と残余という二分法は、20 世紀のように必ずしも国民国家単位の地域とは結びつかなくなっている。いわゆる地理的な意味での西洋に「残余」的な空間が増殖し、旧来「残余」と見做されていた国々の中には西洋の国々以上に「西洋的」な機能を有する場所や制度も次々と生まれている。こうした現実社会での変化は、これまでの地域研究に帯びていた眼差す者と眼差される者との間の権力関係や知の「中心」と「周辺」の構造などにも変化を及ぼしている（髙田 2022）。

また酒井は別の論考で、地域研究と国民国家の関係についても批判的に論じている。酒井曰くこれまでの地域研究は、国民国家に基づいた国際的な関係であるインターナショナリティ（internationality）に依拠していた。インターナショナリティは明確な国民国家間の境界を想定しており、従って領土化された空間を前提とする。米国で発展したエリア・スタディーズは、パクス・アメリカーナのもと、こうした領土化された世界を鳥の目（birds-eye）のように上から眼差す世界観を基礎としていた。酒井はこうした知の生産様式を批判し、それに代わってトランスナショナリティ（transnationality）の概念から地域研究を再構築することを訴える。トランスナショナリティの視座は、国境のように上から国と国との間の明確な境界を設定するものではない。水平線のように世界がつながっていることを前提とし、見えているこの世界と見えなくなっているあちらの世界という曖昧な区分けを想定する（酒井 2021: 8）。言い換えれば、トランスナショナリティは、実際には世界はつながっているにも関わらずそこに制度的、認識的な壁を作り出す国民国家の世界観を打ち砕く視座と言えよう。それは、国民国家によって区分けされた「我々」と「他者」という関係性に対するオルターナティブとして、つながりを意識した「ここ」と「あそこ」の関係性を作り出す政治的プロジェクトとも言える。

4. トランスナショナルな日本研究

ここで取り上げた地域研究におけるトランスナショナリズム論は、社会学、歴史学のそれと比べても国民国家、そして国民国家に結びついた近代の人文社会科学に対する強い批判を内包している。こうした境界を曖昧にし、国民国家の境界をずらしていくことで分断を乗り超える視座は、極めて重要だ。何故なら人文社会科学者自身も、国民国家の枠組みに支配されてしまっており、無意識に国民国家の境界を基に「我々」と「他者」の分断を内面化しているからである。21 世紀の研究者は、こうした国民国家による認識の支配に対して常に反省的であるべきだ。しかしながら、実証レベルで国民国家批判を中心とするラディカルな方法論的ナショナリズム批判を真正面から受け止めてしまえば、それは国民国家の無化に行き着きかねない。方法論的ナショナリズム批判以降、どのように国民国家に代わる別の変数を用いて分析することができるのか様々に論じられてきた[7)]。トランスナショナリズムと国民国家の距離をどう考えるべきかは、とりわけ地域研究にとって国民国家がその基盤にあるからこそ難しい問題である。では、こうした地域研究とトランスナショナリズムの悩ましい関係を乗り越える方法というのはあるのだろうか。その答えの一つには、国民国家を基本単位とするのではなく、リージョンといった国民国家よりも曖昧な区分けに基づく領域の内部での様々な移動とつながりについて検証していくという方法があり得る。要するに、国民国家とは別の空間を対象に据えることで国民国家の罠から逃げるというわけだ。既に欧州連合による統合が進んだ欧州では盛んに展開されてきたアプローチであるが、近年それをアジアに適応させていく研究も増加している（Sahoo ed. 2022）。もちろん、日本とアジアの新たな関係の構築が求められる中で、アジア内での結びつきの歴史と現在を調査していくことは重要な課題だ。ただし、リージョナルといったより大きな地理的、文化的な空間を想定することで国民国家を相対化する方法は、自ずと残存するそれぞれの国の特性や特徴を後衛に退けてしまう。

ここではもう一つ別の視点からトランスナショナルな地域研究のあり方を

提示してみたい。それは、あえて国民国家を中心に据えてトランスナショナリズムを考えるという方法である。既に述べた通り、21 世紀に入ってから、方法論的ナショナリズムを乗り超えるために多くのトランスナショナルな視点からの実証分析が展開されてきた。それは、日本を対象とする研究においても例外ではない。ただし、これまでの事例研究からは問題点も垣間見えた。その問題とは、人々は完全に「自由」に国境を越えることなどできないという事実にしっかりと向き合ってこなかったことである。これまでの研究では国境を越える現象を追うことに注意が向かい、全体としては「境界」とそれを管理する存在へ十分に注意を払ってこなかった。言い換えれば、人、モノ、情報の国境を越える現象の記述に主眼が置かれ、トランスナショナルな実践を管理、制限また時に促進する制度やその権力の問題への関心は決して高くはなかった（Takata 2020; Green 2019: 52）。とりわけナショナルな磁場がもたらす様々な制限への注目は不十分だったと言える。その理由の一つは、意識的であれ無意識であれトランスナショナリズム研究には国民国家批判の精神が付きまとっているからであろう。極端に言えば、方法論的ナショナリズム批判には、国境を越える存在に国民国家を超えるユートピアを見出す意識が潜んでいた。

しかしながら、現実として国民国家が国境を越えた移動に果たす役割は大きい（Mitchell 2017: 5）。グローバリゼーションが進んだとしても国民国家は消滅しておらず、制度的、文化的機能を変質させながらも存続し、多かれ少なかれ人々はその磁場に埋め込まれながら生活を営んでいる。もちろん国境を越える移動に影響を与えるのは国民国家に限らず、国際政治や地方政治、そしてコミュニティ、学校、家族、企業、各種団体といった中間集団の役割も決して小さくはない。また、トーマス・ファイストが指摘するように国境を越えるつながりを阻害する様々な境界は、流動的で可変的なものであり、それがどのように移り変わるのかを検証することも大切だ（Faist 2013: 457-9）。しかしながらトランスナショナルという以上、最も強力で乗り越え難いのはナショナルな境界である。実際に程度の差はあるにせよ（そしてもちろんこの程度の差がどのようなもので何故差が生じるのか自体が重要な問いで

あるが）ローカルな場や中間集団もナショナルなものから逃れることはできず、国民国家がマクロかつ包括的な制度として機能している。それは、近代が国民国家という強靭な制度の形成を中心に発展してきたからに他ならない。

またそうした国民国家の力は、人々がある国から別の国へと移動する機会に影響をもたらすだけでなく、たとえある人物が別の国に移動したとしてもしばらくすれば徐々に行き着いた先のナショナルな磁場に絡め取られていく。もちろん移民研究のトランスナショナリズム論が示唆するように、国境を越えたネットーワークの拡大や継続したトランスナショナルな移動は、国民国家の影響力を相対的に低減させ、実際に 20 世紀の終盤以降、テクノロジーの発達によってそうした実践は容易になっている。しかしながら、グローバル化への反動としてのポピュリズム的ナショナリズム現象を含めてそれでもなお残る国民国家の力学があり、それは一体どのようなものなのかを改めて正面から捉え直す必要がある。そのために重要なのは、方法論的ナショナリズム批判を受け止めた上で、トランスナショナリズムに国民国家を再導入する（Bringing the nation-state back in）ことではないだろうか[8)]。そして、トランスナショナルとナショナルの相克を見ていくには、国民国家と密接な関係を持つ地域研究の視点は有益となる。

こうした問題を考えるにあたっては、国境を越えた移動と一言で言ってもそれぞれの国によってそのリアリティが異なるという単純な事実から始めることが重要だろう。我々は国境を越えることを一元的に捉えてしまいがちだが、トランスナショナルなあり方というのは地政学的な条件、政体、国民の意識や文化などマクロからミクロまでそれぞれの国民国家の特徴と密接に絡んでいる。それは、例えば地続きのヨーロッパの国々と日本のような島国とでは大きく異なるだろうということからも容易に想像できる。こうした問いは実は古くて新しい問題であり、過去にも幾人かの日本の研究者が関連した課題について論じてきた。例えば丸山眞男は、1984 年発表の講演原稿「原型・古層・執拗低音―日本思想史方法論についての私の歩み」の中で日本の思想

史の特徴を「トランスナショナリズム」との関係から捉えている。丸山は、日本を「文化的には有史以来『開かれた社会』であるのに、社会関係においては、近代に至るまで『閉ざされた社会』である」と位置づけ、日本思想史の課題は、このパラドックスをどう解くのかにあると述べている（丸山 2004: 120-1）。興味深いのは、丸山はこうした矛盾を日本（思想史）の特徴とし、その理由を地政学的な位置に求めている点にある。日本が「世界文化」（主に中国を想定）から「不断に刺激を受けながら、それに併合されない」地理的位置にあり、それゆえ世界文化からの併合もされなければ無縁にもならず、これに「自主的」に対応し、改造措置を講じる余裕をもつと説明する。こうした地政学的な側面が一つの要因となって「『よそ』から入って来る文化に対して非常に敏感で好奇心が強いという側面と、それから逆に『うち』の自己同一性というものを頑強に維持するという、日本文化の二重の側面」が生じるという（丸山 2004: 133）。こうした日本の海外との文化接触のあり方については、丸山以外にも日本文化論の一つの中心的議題として定期的に論じられてきた。例えば、丸山と同時期に活躍した加藤周一による世界の様々な文化を取り込む日本文化の「雑種性」を積極的に評価する文化論は良く知られている（加藤 1974）。また西川長夫による日本がその長い歴史の中で欧化と回帰のサイクルをどのように経験してきたのかを分析した論考は、日本がグローバリゼーションの荒波に飲み込まれはじめる時期に発表され、注目を集めた（西川 2004）[9]。

もちろん、日本人論への懐疑と方法論的ナショナリズム批判を経た 21 世紀の視点からすれば、これらの仕事は「日本」を実態的、単一的に捉える視座や決して緻密とは言えない分析など問題点も多い。それでも、例えば丸山の問題提起「日本の地政学的な位置が文化接触に与える影響」という発想自体は、簡単には捨てきれない示唆に富むものと言える。とりわけ大切なのは、日本のトランスナショナルな実践を他国のそれと比較をすることで総体としての「日本的」トランスナショナリズムというものがあり得るのか検証していくことであろう。こうした視座は、一方で広くトランスナショナリズム研究一般への貢献が期待される。例えば、日本のトランスナショナリズムにとっ

て幕末から明治初期、そして第二次大戦後の二つの「開国」は極めて重要だが、トランスナショナリズム論の思想的、方法論的文脈にこうした「開国」を位置づけるということはなされていない。また他方で、日本を越えていくトランスナショナルな（不）可能性を追いかけていくことで逆照射的に新たな日本的なものが浮かび上がってくることも想定される。国境を越えた移動の例としては、移民やツーリズムはもちろんのこと、留学などのトランスナショナルな学びの経験、情報、文化、知の国境を越えた伝播、スポーツ選手の国境を越えた移動、市民社会のトランスナショナルなネットワーク、そして思想家や文学者などの海外経験が作品に与えた影響など、枚挙にいとまがない。また国民国家のトランスナショナリズムへの介入にしても、入国管理、査証、市民権といった法的な問題にはじまり、グローバル化に対する国民世論や国民意識、言語政策やコミュニケーション文化、「ホスピタリティ」の精神、「ハーフ」の位置づけやエスニック・マイノリティの呼称の問題、そしてナショナリズムや排外主義まで国民と国家の様々な側面から捉えることができる。こうしたトランスナショナルな移動と制限を個々の事例にとどめるのではなく、新たな「日本像」を構築することを意識して検証していくのがトランスナショナルな日本研究の一つのあり方と言えるのではないだろうか。

5. おわりに

本稿では、トランスナショナリズムの概念（第２節）と方法論（第３節）を整理した上で、トランスナショナルなアプローチからの日本研究について論じてきた（第４節）。本稿で述べてきた通り、トランスナショナルは様々な歴史的、現代的現象を扱うことのできる包括的なアプローチである。実際にトランスナショナルという言葉を用いるかは別として、これまでも同様の視角や問題意識から日本の事例を扱った研究は多く生み出されてきた。それでもあえて「トランスナショナルな日本研究」という視点を導入することの効果は、問題意識を共有し、個別の事例を結びつけ、「日本」というより大きな対象の考察へと発展させていくことにあるだろう。

このように本稿は、トランスナショナリズム概念の特徴とトランスナショナルな日本研究の可能性を探ってきたわけだが、実証レベルの研究を想定するにあたって幾つかの疑問点も残る。それは、概念の射程範囲を巡る問題である。果たしてトランスナショナリズムが対象とするのはどの時代のどのような現象で、どのような事例は含まれ、またこぼれ落ちてしまうのだろうか。この疑問は一つに、トランスナショナリズム論と国民国家批判の問題に関連する。トランスナショナリズム論には、多かれ少なかれ「国民国家を乗り超える」精神が宿っていることは、本稿で繰り返し述べてきた。だが、実際の国境を越える行為は、国民国家を乗り超えることとは必ずしも結びつかないのではないかという疑問も生じる。確かに、帝国の拡大は、宗主国から植民地への大量の移動を伴う国境を越える実践と言えるし、ファシズムさえも国境を越えて連帯する（Finchelstein　2010）。幕末に国外へ渡った使節団のメンバーたちも、むしろ日本の国民国家形成のために国境を越えた。またトランスナショナリズムを象徴する移民にしても、例えば明治期のハワイへの官約移民、大正から昭和にかけてのブラジルへの移植民政策など国家主導による国際移動の例も珍しくはない。こうしたようにあらゆる国境を越える実践が、直ちに国家を超えることにはならない。それでは、そうした事例はトランスナショナリズムの対象にはならないのだろうか。一概にそうとは言えないだろう。何故なら現実はより複雑だからだ。仮に、政府主導の移民政策の一環として海を渡ったとしても、ホスト国でコミュニティを形成し、他の人種、エスニシティの人と家族を作り、「ハーフ」の子供が生まれたりもする。これは結果的に社会のダイバーシティを促進し、また彼らは複数の国々を行き来するいわゆるトランスナショナルな存在にもなり得る。従って、人々の国境を越えた移動は、国民国家を超えるような実践を伴う場合もあれば、時に国民国家の磁場に絡め取られたりもする重層的な行為と考えられるべきである。こうした複雑性を紐解いていくことこそトランスナショナルな実証研究の真髄と言えるだろう。

もう一点は、歴史的射程に関わる問題である。歴史家からは度々トランスナショナリズムは国民国家の境界のみを想定するのかという指摘が出され

る。本稿で論じてきたように、確かにこの概念は、近代国民国家を乗り超えることを出発点としている。また 20 世紀の後半の国境を越える実践の増幅が、研究者をこうした視点から社会や文化を研究することの重要性に気づかせた。従って、トランスナショナリズム論は、第一に近代国民国家を乗り超える現代的な現象を捉える概念として発展してきたことは否めない。しかしながら、トランスナショナリズムは、より広い歴史的射程に応用可能な概念だと言える。実際に、これまでのトランスナショナル・ヒストリーでは、必ずしも近代以降の現象だけでなく、古代や中世の越境をも対象にしてきた（Green 2019: 37）。領土的な境界は何も近代以降に生じた現象ではなく、当然それ以前にも存在していたし、そうした領土を越える実践は、古来から展開され続けてきた。ただし、江戸幕府の国境管理と明治政府の国境管理の仕方が違うように、近代以前と以後では領土的越境の在り方も異なってくるだろう。近代以前と以後、また近代以降のトランスナショナリズムの変化や変遷を捉えていくこともこの領域の重要な研究の一つとなる。

トランスナショナルな日本研究は端緒についたばかりであり、こうした疑問以外にも様々な課題が残されている。また本論では十分に議論を展開できなかったが、最後に付け加えておくべき重要な点として、このような研究を展開するにあたっては、研究者自身がトランスナショナルな存在として研究を進めていくことであろう。自身が国境を越え、また異なる文化的な背景を持つ研究者との対話を通じて、自らのナショナリティを絶えず問い直すことで、新たな「日本」の姿を発見することができるのではないだろうか。

註

1）同じく人類学者の Arjun Appadurai（アルジュン・アパデュライ）も 1996 年に出版した *Modernity at Large*: *Cultural Dimensions of Globalization* の第 3 章 "Global Ethnoscapes: Notes and Queries for a Transnational Anthropology" においてトランスナショナルな人類学を提唱している。（Appadurai 1996）。

2）類似の表現としては、cross-border や border crossing などがあるが、ここでの border は具体的な「国境」そのものを指す場合がほとんどで、越境が意味するところの広い意味での「境界」ではない。

3）方法論的ナショナリズム批判に関する日本語による初期の論考としては例えば佐藤成基（2009）がある。

4）イマニュエル・ウォーラーステイン（2011 [2013]）の世界システム論は、その例外である。グローバル化以前の早い時期に世界的な視点から分析する理論を立ち上げた点にその画期性がある。ただし、世界システム論には、トランスナショナリズムが持つ国民国家批判の意識はあまり見られない。
5）これに近い概念としては、connected history（コネクテッド・ヒストリー）, entangled history（エンタングルド・ヒストリー）または entangled modernity（エンタングルド・モダニティ）といったものがあるが、いずれにせよ、国境を越えた人、モノ、情報のつながり、とりわけ、その結節点や相互の複雑な絡み合いに着目する研究である。
6）ブルース・カミングスが米国のエリア・スタディーズの変遷について執筆した1997年時点では、トランスナショナルという語はまだ地域研究では一般的でなく、「インターナショナル」が使われていた。ただし、カミングスがここで述べている「インターナショナル・スタディーズ」には国民国家を超えるというその後のトランスナショナル地域研究の萌芽が見える。
7）例えば、移民研究においても国民国家のみを人々が埋め込まれた構造として据えるのを避け、様々に複雑に絡み合った「文脈（context）」から国境を越える実践を捉えるべきだという議論が展開されている（Weiß and Nohl 2012）。
8）イギリスの社会学者ダニエル・チェルニロ（Daniel Chernilo）も、国民国家を近代社会の絶対的な土台とする方法論的ナショナリズムに抵抗するためには国民国家を真正面から取り扱うことが重要だと述べている（Chernilo 2017: 3）。
9）初版は1992年に筑摩書房から出版されている。

文献リスト

Appadurai, Arjun, 1996, *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, Minneapolis: University of Minnesota Press.

Arnason, Johann P., 2000, “Communism and Modernity,” *Daedalus*, 129 (1): 61-90.

Basch, Linda, Nina Click Schiller, Christina Szanton Blanc, [1993] 2005, *Nations Unbound: Transnational Projects, Postcolonial Predicaments, and Deterritorialized Nation-States*, New York: Routledge.

Beck, Ulrich, 2007, “The Cosmopolitan Conditions: Why Methodological Nationalism Fails,” *Theory, Culture & Society*, 24(7-8): 286-90.

Bhabha, Homi, 1994, *The Location of Culture*, London: Routledge.（本橋哲也，正木恒夫，外岡 尚美，阪元 留美訳，2012，『文化の場所―ポストコロニアリズムの位相』法政大学出版局）.

Chernilo, Daniel, 2017, “Methodological Nationalism,” Bryan S. Turner, Chang Kyung-Sup, Cynthia F. Epstein, Peter Kivisto, J. Michael Ryan, William Outhwaite eds., *The Wiley Blackwell Encyclopedia of Social Theory*, Hoboken: Wiley-Blackwell, 1-3.

Conrad, Sebastian, 2016, *What is Global History?*, Princeton : Princeton University Press.（小田原琳訳，2021，『グローバル・ヒストリー－批判的歴史叙述のために』岩波書店）.

Cumings, Bruce, 1997, “Boundary Displacement: Area Studies and International Studies during and after the Cold War,” *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, 29(1): 6-26.

Faist, Thomas, 2013, “Transnationalism,” Steven J. Gold and Stephanie J. Nawyn eds., *Routledge International Handbook of Migration Studies*, New York: Routledge, 449-59.

Finchelstein, Federico, 2010, *Transatlantic Fascism: Ideology, Violence, and the Sacred in*

Argentina and Italy, 1919-1945, Durham: Duke University Press.
Gilroy, Paul, 1993, *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, London: Verso Books.（上野俊哉，毛利嘉孝，鈴木慎一郎訳，2006,『ブラック・アトランティック―近代性と二重意識』月曜社）.
Go, Julian and Monika Krause, 2016, "Fielding Transnationalism: An Introduction," *The Sociological Review*, 64(2_suppl), 6–30.
Green, Nancy L., 2019, *The Limits of Transnationalism*, Chicago: University of Chicago Press.
Hall, Stuart, 1996, "The West and the Rest: Discourse and Power," Stuart Hall, David Held, Don Hubert, and Kenneth Thompson eds., *Modernity: An Introduction to Modern Societies*, Oxford: Blackwell Publishers, 184-227.
Hannerz, Ulf, 1996, *Transnational Connections: Culture, People, Places*, New York: Routledge.
Ikeuchi, Suma, 2022, "A Historical Materialist Approach to Transnational Japanese Studies," Ajaya K. Sahoo ed., *Routledge Handbook of Asian Transnationalism*, New York: Routledge, 44-55.
Irie, Akira, 2013, *Global and Transnational History: The Past, Present, and Future*, New York: Palgrave Macmillan.
Journal of Global History, 2023, (Retrieved January 23rd, 2023, https://www.cambridge.org/core/journals/journal-of-global-history)
加藤周一，1974,『雑種文化―日本の小さな希望』講談社 .
Keck, Margaret E. and Kathryn Shikkink, 1998, *Activists Beyond Borders: Advocacy Networks in International Politics*, Ithaca: Cornell University Press.
Keohane, Robert, and Joseph S. Nye, Jr., 1972, *Transnational Relations and World Politics*, Cambridge: Harvard University Press.
Lamont, Michéle and Virág Molnár, 2002, "The Study of Boundaries in the Social Sciences," *Annual Review of Sociology*, 28:167-195.
丸山眞男，2004,「原型・古層・執拗低音―日本思想史方法論についての私の歩み」『日本文化のかくれた形』，岩波書店，87-151.
Mitchell, Katharyne, 2017, "Transnationalism," Douglas Richardson, Noel Castree, Michael F. Goodchild, Audrey Kobayashi, Weidong Liu, and Richard A. Marston eds., *International Encyclopedia of Geography: People, the Earth, Environment, and Technology*, Hoboken: Wiley-Blackwell, 1-6.
西川長夫，2004,『増補　国境の越え方―国民国家論序説』，平凡社 .
Sahoo, Ajaya K. ed., *Routledge Handbook of Asian Transnationalism*, New York: Routledge.
Sakai, Naoki, 2021, "Internationality and Transnationality: Translation and Area Studies," paper presented at The 4th EU-Japan Young Scholars Workshop at Alsace, 1-27.
佐藤成基，2009,「国家／社会／ネーション－方法論的ナショナリズムを超えて」佐藤成基編『ナショナリズムとトランスナショナリズム－変容する公共圏』，法政大学出版局，13-31.
Skocpol, Theda, 1979, *States and Social Revolutions: A Comparative Analysis of France, Russia, and China*, New York: Cambridge University Press.
Steger, Manfred B., *Globalization: A Very Short Introduction 5th Edition*, Oxford: Oxford University Press.
Takata, Kei, 2020, "The Japanese Global Sixties in Isolation: Towards a Global Historical Sociology of the Sixties," Grzegorz Piotrowski ed., *1968 - A Global Approach*, Gdansk: European Solidarity Center.

髙田圭，2021,「グローバル地域研究としての国際日本学―日本を超えて，日本をとらえる，思考と手法―」『国際日本学』18: 3-36.
_____，2022,「コスモポリタンなアカデミック・パブリクスと国際日本学―誰に向けて、どのように日本を語るか―」『国際日本学』19: 27-60.
Tedeschi, Miriam, Ekaterina Vorobeva, and Jussi S. Jauhiainen, 2022, "Transnationalism: Current Debates and New Perspectives," *GeoJournal*, 87: 603-619.
Urry, John, 2000, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the Twenty-First Century*, New York: Routledge.（吉原直樹監訳，2015,『社会を越える社会学―移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版会）.
Walker, Gavin, and Naoki Sakai, 2019, "Guest Editor's Introduction: The End of Area," *Positions*, 27(1): 1-31.
Wallerstein, Immanuel, 2011, *The Modern World Systems I: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*, California: University of California Press.（川北稔訳，2013,『近代世界システム I―農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』名古屋大学出版会）.
Weiß, Anja and Arnd-Michael Nohl, 2012, "Overcoming Methodological Nationalism in Migration Research Cases and Contexts in Multi-Level Comparisons," Anna Amelina, Devrimsel D. Nergiz, Thomas Faist and Nina Glick Schiller eds., *Beyond Methodological Nationalism Research Methodologies for Cross-Border Studies*, New York: Routledge, 65-87.
Wimmer, Andreas and Nina Glick Schiller, 2002, "Methodological Nationalism and the Study of Migration," *European Journal of Sociology*, 43(2), 217-40.

<ABSTRACT>

Toward Transnational Japanese Studies

Kei Takata

This paper discusses the transnational approach to Japanese studies. As a result of the expansion of practices cutting across nation-states since the end of the 20th century, different approaches that explore our world from a transnational lens have significantly enhanced. Transnational studies that began in sociology, historical studies, and cultural studies have recently applied to area studies, including Japanese studies. The phrase "transnational Japanese studies," however, sounds contradictory as it combines two words with contrary meanings – transnational and national (Japan). What do we mean by exploring national phenomena from a transnational perspective? Would this approach be a denial of Japanese studies or rather a rebirth of it? I argue that the transnational approach would relativize the nation-state framework while bringing us an alternative view of Japan. This paper will first discuss the concept of transnational by comparing it with similar concepts such as global, international, and boundary-crossing (*ekkyō*). Then, it will explore how global and transnational turn has evolved in different fields – sociology, historical studies, and area studies – to overcome the so-called methodological nationalism that was deeply embedded in modern social science and humanities. The final section will discuss the main part of this paper - transnational Japanese studies. While to overcome methodological nationalism in area studies, area specialists have moved away from nation-states and focused on the larger region – such as "Asia." Given the remaining presence of national states in our society, I suggest that instead of evading the nation-state from its analysis, "bringing the nation-state back in" to the transnational analysis will generate new insights into our understanding of Japan.